



ワークショップ 「戦争と戦没者をめぐる死生学」 P4

■ 巻頭エッセイ

永ノ尾 信悟

■ イベント報告

ワークショップ

「生殖と死の生命倫理」

シンポジウム

「死生学の可能性」

ワークショップ

「戦争と戦没者をめぐる死生学」

臨床倫理セミナー

他

■ 企画案内

《医療・介護従事者のための死生学》

2009冬季セミナー

「喪失とケア」に関する3つのワークショップ



シンポジウム「死生学の可能性」 P3



臨床倫理セミナーin さっぽろ P6



永ノ尾 信悟 (東洋文化研究所教授 印度哲学・仏教学)

グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の研究協力者になったことで、新しい研究の視点を与えてもらった気がする。その後、自分の専門の古代インドの儀礼文献を読む際に、意識して死と生に関する情報を集めるようになった。今回はそのようにして集めた情報のごく一部の分析を紹介したい。

最も長い命は不死である。天界が不死であり(TB 1.6.7.5)、天界に行くことが不死になることであると考えられた(JB 1.332 [138,30-32])。したがって、不死性はあの世においてしか得られない(ŚB 10.2.6.17, AA 2.6 [123,14-124,2])、あるいは体を捨てて後に得られるとされた(ŚB 10.4.3.9)。そして、いくつかのヴェーダ祭式、たとえばアグニチャヤナ(ŚB 10.5.1.5)、アグニホートラ(JB 1.2 [3,32-4,1])、ガヴァームアヤナ(JB 2.427-428 [345,7-14; 17-18])などを行うことにより不死になる。

天界ではじめて不死になるという考えとは別な考えがヴェーダ祭式の文献に散見される。子孫が次々と生まれることが人間にとり不死である(TB 1.5.5.6, TA 1.30.1)、あるいは、人が三つの人生の段階を全うすることが不死であるというものである(ŚB 12.9.1.8)。それは端的に寿命(āyus)が不死であるとも表現される(MS 2.2.2 [16,11; 13])。そして具体的に百年生きること(ŚB 10.1.5.4)、あるいは百年またはそれ以上生きること(ŚB 10.2.6.8)が不死であるともいわれる。

百年生きるとはもっとも古い文献であるリグヴェーダやアタルヴァヴェーダ以来しばしば切望されてきた(RV 2.27.10, AV 2.13.3)。そして家庭儀礼として行われた人生儀礼のさまざまなものの中で絶えず子供が百年生きるようにという願いがマントラの形で表明される。妊娠中に行われる男児の誕生を祈る儀礼、子供が生まれたときの儀礼、父親が旅から帰り子供を祝福するとき、そして、最も多くの例にであるのがヴェーダ学習のための入門式においてである。上に紹介した AV 2.13.3 のマントラは生徒が新しい衣をまとった時に唱えられる。「お前はこの衣をまとったところだ、健康のために。そして、お前は人々をのろいから守るものとなったのだ。百の秋をすっかり生きよ。そして富の榮を集めよ」。

同じ入門式のなかで、生徒が太陽を敬う際に唱

える MānGS 1.22.11 が伝えるマントラが興味深い。「神々によって置かれたその目が、東に白く昇るのを、我々は百年見たい。百年生きたい。百年聞きたい。百年語りたい。百年弱くなりたくない。そして百年以上も」。このマントラの「百年生きたい」という部分までは RV 7.66.16 と同じであるが、それにさらなる願いが付加されていることがわかる。今から20年ほど前、私はインドのビハール州の北部のとある村で、毎朝、年老いたバラモンが行う朝の勤行を見る機会があった。その中で、太陽の礼拝が行われたが、その老バラモンはこの MānGS 1.22.11 が伝えるものと同じマントラを唱えていた(Einoo 1989: 397-398)。全く同じマントラは白ヤジュールヴェーダのマントラ集(VS 36.24)にすでにあり、白ヤジュールヴェーダの伝統が残る北インドで約3千年間伝えられてきたのであろうか。

百年を表す場合に年を意味する語がつかわれるのはまれで、冬、雨季を意味する語が使われる場合もあるが、圧倒的に多くの場合秋を意味する zarad が用いられる。仏教の儀礼文献では何百年、何千年、あるいは数劫にわたる寿命をかなえるという儀礼の記述にであうことがある。比較的早い仏教の儀礼文献である『孔雀明王経』では、ブラフマニズムの伝統と同じく「如来により語られたこの大なる孔雀のマントラの王により…彼(または彼ら)が百の雨季生きるように、百の秋を見るように」で終わる呪文を何度も何度も伝えている。百年の寿命を全うしたいという願望は、広く南アジアの伝統に根付いているようである。

略字解：AA アイタレーヤ・ブラーフマナ、AV アタルヴァヴェーダ、JB ジャイミニヤ・ブラーフマナ、MānGS マーナヴァ・グリフヤーストラ、MS マイトラーヤニー・サンヒター、RV リグヴェーダ、ŚB シャタパタ・ブラーフマナ、TA タイッティリーヤ・アーラニヤカ、TB タイッティリーヤ・ブラーフマナ、VS ヴァージャサネーイ・サンヒター。

Einoo 1989: 永ノ尾信悟「Mahādevapūjā: Mithila 地方の事例報告」『国立民族学博物館研究報告』14巻2号、pp. 379-451。



竹内 整一（人文社会系研究科教授 倫理学）

2009年6月14日（日）、「応用倫理教育プログラム」との共催の公開シンポジウム「死生学の可能性」が、法文2号館・文学部1番・2番教室で開催された。これは、さきごろ完結したシリーズ『死生学』全5巻（東大出版会）の出版記念も兼ね、この機会に一般市民に開いたかたちで「死生学の可能性」を問い直そうとして企画されたものである。

基調報告を拠点リーダーの島藺進氏が、またパネリストは、金森修（科学思想）、最相葉月（ノンフィクション作家）、高橋都（健康医学）、森岡正博（生命学）の各氏が、また司会は竹内が務めた。

基調報告で島藺氏は、東大「死生学」プロジェクトが始まるまでの、こうした問題への取り組みの歴史を踏まえ、とりわけ欧米でのDeath Studiesについてあらためて整理したうえで、それらを学びつつかつそれらとの差異を意識しながら追求してきたところに、われわれの新しい死生学があると位置・意味づけた。そしてそこに、(1) 死生に関わる文化・思想の比較研究、(2) 死生をめぐる倫理や死生のケアについての理論的研究、(3) 死生に関わる実践現場への関与、という3つの思想課題があると提示、それぞれについて具体的に問題点を指摘した。すなわち、(1) Death Studiesに暗黙に前提されてきたキリスト教や西洋文化の伝統を相対化し、多様な死生の文化・思想に基づいた研究を展開するところに、この学の必然性があり、また大きな可能性がある、(2) 伝統においても問われてきた死生をめぐる価値の理論的諸問題は、現代における科学技術のさらなる発展によって、さらにその緊要度、複雑度を増してきている、(3) 医療、ケア、教育などの諸分野において、現場と死生観に関わる専門的学知の接点が拡大してきており、それに対応する人文知が求められてきている、と。最後に、以上のような死生学の展開が、ある種現実との緊張関係を失いつつある人文学に新しい活力を提供することができる、と死生学の現状と可能性について報告した。

対して金森氏は、「死の扉と、生の出口」と題して、われわれの生は〈自然としての死〉においてend pointが決められているが、ほんとうのドラマ

は〈文化としての死〉に臨在・喚起・増幅されている生にこそ展開されるのだと、現在一般に流通している死・生の捉え方に対する疑義を提出した。続けて、クローン技術、ES細胞、生殖医療を始めとする生命の誕生に関わる科学技術について取材を続けてきた最相氏は、いま展開しつつある生命をめぐる多様な問題に豊饒なる知恵をそそぎ込む実践的な学問として、またそれを通して深く広い普遍価値への見直しをもたらす学問としての死生学へ期待を述べ、また合わせてそこへのジャーナリズムの役割と可能性にも言及した。続いて医学部の高橋氏は、最近始められてきた、がんの「サバイバーシップ」研究など「現実的な死の可能性を認識したあとの生」に関する研究はますます重要度を増してきており、医療現場とそれをささえるさまざまな知を横断する学際領域としての死生学に期待を寄せた。最後に、はやくから「生命学」を提唱されてきた森岡氏は、「やがて死んでしまうのになぜ生きなければならないのか」という根源的問いの上に構築されるべき「生命の哲学」、さらに、生命に関する人文学からのアプローチを結びつけるための枠組みとしての「生命人文学」の構想を展開し、その観点から死生学との深い連携を訴えた。

「死生学」をめぐるこれらの4時間の議論は、最終的にそもそも「学」とは何かという、最後の（また最初の）問いにたどり着くところで終わったが、あらためて本シンポジウムにおいて新しい「学」としての「死生学」の大きな可能性が確認されたように思う。（シンポジウム報告集は、3月末までに刊行予定）。



「戦争と戦没者をめぐる死生学」

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

去る2009年6月6日、東京大学文学部一番大教室において午前10時30分より、死生学ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」が開催された。このワークショップは、戦争そして戦没者の慰霊をめぐる諸問題について、おもに日本と韓国の研究者を招いて、死生学的な観点から問題提起をすることを目的とするものであった。70人程度の聴衆が参集し、熱心にワークショップに参加していただいたが、今回のワークショップの性質のゆえに、とりわけ韓国関係の聴衆が多かった。また、今回は日韓同時通訳のシステムを採用し、お互いに母国語で議論をするという形をとった。日本語と韓国語の語順の類似性のゆえに、同時通訳は見事に機能し、今後のモデルケースになったのではないかと思う。

ワークショップは、死生学プロジェクト・リーダーの島菌進教授の開会挨拶からはじまり、四つのセッションがほぼ予定した時間配分に促って進められた。第一セッションでは、モンゴル出身で北海学園大学のテレント・アイトル氏の「蒙古の碑」をめぐる提題、東京大学外国人特別研究員の池映任氏の朝鮮戦争時の済州島での犠牲者についての提題、がなされた。テレント氏は、日本は敵方の戦没者を慰霊する碑を作るといふ、まれに見る寛容な国だ、という論点を詳しく報告してくれた。池氏は、朝鮮戦争時に反共の旗印のもと済州島にて悲劇が起こり、その犠牲者の慰霊が現在の韓国社会でもデ

リケートな問題となっている、という事情を詳述してくれた。この二つの提題に対して、本学東洋文化研究所の真鍋祐子氏がコメントを加え、異なる二つの問題提起をうまく融合させ、戦争によって引き起こされる人々の感情の問題を言挙げした。司会は、第一セッションと第二セッションを通じて、東亜大学の崔吉城氏に務めていただき、的確にまとめていただいた。

昼食後、第二セッションがはじまり、本学人文社会系研究科の加藤陽子氏が、20世紀日本における戦死者とその遺族の問題について提題してくれた。加藤氏は、日本軍および日本政府が戦死者の情報について必ずしも十分にその遺族に知らせてこなかったという歴史的事情について、客観的な資料を駆使しながら詳しく論じた。これに対して、韓国の国防大学の朴榮濬氏がコメントを加え、そもそも近代国家とは何か、戦争体験の思想化が必要なのではないか、といった論点が提出された。

第三セッションでは、韓国の慶尚大学校の朴均烈氏が、日韓の戦争に関する消耗的議論の克服についての提題を行い、日本の韓国に対する植民地政策に言及しつつ、竹島問題、日本海呼称問題などについての解決案の可能性が検討された。これに対して、本学人文社会系研究科の六反田豊氏がコメントを加え、そもそも日本と韓国の間には戦争状態というべき事態が存在したのか、といった理論的かつ根本的な問いが提起された。このセッションの司会は本学人文社会





系研究科の本田洋氏が務め、手際よくまとめてくれた。

第四セッションでは、韓国の延世大学の朴政淳氏と、千葉大学の小林正弥氏が、ともにアメリカの哲学者マイケル・ウォルツァーの「正戦論」について提題をした。正戦とは、すべての戦争は悪であるとする平和主義と、戦争時にはルールなどないとする現実主義の中間の立場で、正しい戦争と不正な戦争とがある、とする考え方である。朴氏はウォルツァーに批判的で、むしろ平和主義に向けた見方を提示した。小林氏は、「地球的コミュニタリアニズム」の立場を打ち出し、視点転換によるウォルツァーの正戦論の拡張を提案した。そして筆者自身がこの二つの提題に対してコメントを加え、人間の持つ生物的な攻撃傾向と、国家防衛と自己防衛とのアナロジーの適否、というこのワークショップでは触れられていなかった論点を提起した。司会は、放送大学の山岡龍一氏が務め、適切に論点を整理し、討論を導いていただいた。

それぞれのセッションに対して、フロアからの質問も非常に活発に提起され、大変に多角的な観点から、そして日・韓・モンゴルという東アジアの視点に立脚して、内容の濃いディスカッションが行われた。そして第四セッションの後、筆者自身が、オーガナイザとして閉会の挨拶をした。そこで今回のワークショップの二つの意義に言及した。第一に、死生学というどうしても医療倫理・生命倫理に焦点が合わされやすいが、実は死生学プロジェクトの射程はかなり広く、戦争は本質的な主題の一つであり、

それを今回取り上げられたという点は大変意義深い。第二に、死生学プロジェクトが、今回のワークショップを通じて東アジアとりわけ韓国との交流に大きく踏み出せたという点もまた大きな意義がある。死生学プロジェクトは、PeSeToやBESETOの企画を通じて、韓国ソウル大学との交流をすでに行っているが、ソウル大学以外の韓国の研究者との交流機会になったということはまことに意義があったと思う。

ワークショップ後は、医学部教育研究棟13Fの「カポ・ペリカーノ」にて懇親会を開催した。日本語と韓国語が入り混じり合いながら、大いに議論も盛り上がり、懇親も深めることができた。最後になったが、このたびのワークショップ開催に際して、人文社会系研究科の韓国朝鮮文化研究室、そして死生学プロジェクトの若手特任研究員の方々、とくに竹内聖一氏と朴倍暎氏、にご足労いただいたこと、記して感謝申し上げたい。



臨床倫理セミナー in 霧島

2009年2月21日(土)、本G-COE主催、霧島市立医師会医療センター倫理委員会共催で、「臨床倫理セミナー in 霧島」が開催された。このセミナーは、本G-COE事業推進担当者の清水哲郎が中心となって各地で実施しているもので、霧島での開催は今回が初めてである。

会場となったホテル京セラには看護師を中心に約60名の医療者が集まった。まず最初に清水が講義を行った。参加者が臨床倫理に触れるのは初めてであるということとを考慮し、講義では臨床倫理の枠組みを紹介した上で、医療上の意思決定において留意すべき基本的なことがらを確認された。

講義に続いて、清水が開発した臨床倫理検討シートを使った症例報告が参加者の手により行われた。症例の1つは、糖尿病性腎症発症後に胃がんが発見された70代女性患者で、本人が病状についての説明を聞きながら意思決定を家族任せにしていた。また、もう一つの症例は大腸がんを発症して化学療法を受けている60代男性患者で、本人が病状の悪化を否認する傾向があった。そのため、新たに行う化学療法の効果について患者に正確な説明をすることが困難であるという事例であった。通常のセミナーであれば報告の後にグループワークを行うところであるが、今回は初回のセミナーということで、全体の質疑応答を通じて症例に対する理解を深めるという方法がとられた。

二つの症例報告の後、清水とともに臨床倫理セミナーの開催に携わってきた石垣靖子氏(北海道医療大学教授)の講義が行われた。氏は看護師の視点から患者に対するケアのあるべき姿について論じた。豊富な看護経験に裏打ちされた氏の講義は、看護のあり方を再確認させると同時に、看護に携わる参加者を大いに勇気づけるものでもあった。

(竹内)



竹内 聖一 (本G-COE特任研究員 哲学)
会田 薫子 (本G-COE特任研究員 医療倫理学)

臨床倫理セミナー in さっぽろ

2009年2月28日(土)、本G-COEと東札幌病院臨床倫理委員会の共催で、「臨床倫理セミナー in さっぽろ」が開催された。このセミナーは、G-COE事業推進担当者の清水哲郎が中心となって実施している医療・介護従事者対象のリカレント教育の一環として行われているもので、札幌での開催は2008年10月に次いで2回目であった。

会場となった東札幌病院には看護師を中心に約50名の医療者が集い、G-COE特任研究員の竹内聖一と会田も参加した。参加者の多くが前回のセミナーの受講者であり、すでに臨床倫理のコンセプトとプロセスおよび清水が開発した臨床倫理検討シートの前半部分の使い方を概観していたことから、今回、清水は、同シートの後半部分の「問題点の抽出と対応の検討」に関する講義で、同シートの活用法について参加者の理解を促した。講義に続いて、臨床倫理的に困難な問題を抱えた2つの症例について、同シートを使いながら課題を整理し、グループワークと全体討議を通して、課題解決に向けた具体的な介入方法を探った。

症例の1つは、脳梗塞後遺症で摂食困難な80代男性患者で、担当の医師と看護師は、胃瘻の一般的な利点を踏まえて、この患者にも胃瘻栄養法を導入することが望ましいと考えていたが、患者家族はそれに反対していた。医療側は「胃瘻ありき」で考えがちであり、個別の患者に合わせた対応が不十分になりがちであるとの反省が聞かれた。また、担当の医療者は、「患者本人は意思疎通困難」とみなし、胃瘻に関する説明を行っていなかったが、同シートの記述内容を詳細に検討したところ、意思の表出がみられる場合もあることが確認されたため、患者本人に合わせた説明方法を工夫し、本人への情報伝達を試みる必要があることも浮かび上がった。

いずれの症例においても、治療方法の選択肢を挙げてそのメリット・デメリットを記す際には、治療目的を踏まえた治療方針も記す必要があり、それを患者および家族への説明と連動させることが重要であると指摘された。

(会田)



柳原 良江 (本G-COE特任研究員 社会学・生命倫理学)

香西 豊子 (本G-COE特任研究員 社会学・医学史)

第一部 子づくりをめぐる文化と倫理

第一部は表題のテーマに基づき、本G-COE特任研究員3名による報告がなされた。石川久彌子『血縁』をめぐる歴史——柳田國男の思想から——は、大正から昭和期にかけて家族が血縁主義に基づくものへと変化するに伴いイデオロギイも変容していった経緯を確認した上で、変容した家族形態に対する柳田の批判を説明した。土屋敦「周産期医療における『遺伝病問題』興隆の歴史——1960-70年代日本社会を中心に」は、表題の時期に地方自治体主導で行われた「不幸な子供の生まれない運動（施策）」の分析を通じて、妊娠女性の身体および胎児の「医療化」を確認しながら、(少産) 少子型社会において生命が「包摂（保護）」と「排除」の論理のもとに認識された構造を明確にした。柳原良江「代理懐胎をめぐるメディア分析——身体と遺伝の意味づけ——」は、代理懐胎を扱った雑誌の表象を用いて、代理懐胎が受容的に捉えられることを可能とした背景を分析した。具体的には、女性の身体経験に新たな意味を付与することで、それを利用可能な対象とみなすレトリックや、遺伝子本質主義の普及に伴い、親子の紐帯の在処が変容し、親子関係が再定義された構造を説明した。

これらの報告に対しコメンテーターの赤川学准教授（人文社会系研究科）から、各報告の詳細に対する疑問に加え、各報告者が自らの報告内容を一人称で捉えた場合、それらの報告は、どのような位置づけになるかとの問いが投げかけられた。時間の都合により、報告者たちは全ての質問には答えられなかったが、赤川学准教授のコメントは、第一部報告において、類似性を持ちつつも個別であった各報告を一本の糸で繋げることにより、報告者たちが言語化しないまま共有していた問題意識を、浮き彫りにするものとなった。（柳原）



第二部 いのちの終わりをめぐる現在

——ドナー側からみた脳死・臓器移植問題

第二部では、本G-COE特任研究員の会田薫子と香西豊子、弁護士で東京大学医療安全学講座客員教授の児玉安司が報告した。

まず、会田が、「脳死の二重基準の臨床上の意味」という題目で、日本の脳死臓器移植法の特徴である「脳死の二重基準」が臨床の現場で持つ意味を、救命センター勤務医を対象とした実証的研究の成果にもとづき報告した。「脳死の二重基準」とは、患者がおなじ脳死の状態にあっても、臓器ドナー候補であれば法的に死亡とされ、ドナー候補でなければ生きていとされることを言う。この脳死基準の適用の二重性に対しては、国内外から、論理的でないとの批判も挙がっている。しかし、臨床の現場においてそれは、終末期医療に裁量の余地を残すよう機能しており、その点から見ると有用であることが示された。

つづく第二報告では、香西が、「ドネーションの史的背景」という題目のもと、人体（の全部もしくは一部）の提供が日本でいかに論じられてきたかを跡づけ、脳死・臓器移植をめぐる議論の歴史的な背景を探った。日本では現在、脳死状態におちいった人から臓器等を摘出するには、本人により事前に提供の「意思」が表明されていることが要件となっている。しかし、その本人の「意思」なるものが、議論の焦点となりはじめたのは、一九七〇年代ごろからであり、むしろそれは、移植医療が進展するという未曾有の事態のなか、合理的・合法的なドナーの条件が探られる過程で見いだされた可能性があることが指摘された。

第三報告者の児玉は、「家族の領分／専門家の領分／国家の領分」という題目で、（脳死・臓器移植の問題にかぎらず広く）医療をめぐる生起している諸問題を俯瞰し、家族・専門家・国家がそれらに対してどのように関与しているかを論じた。

最後に、コメンテーターの清水哲郎教授から、各報告ならびにセッション全体に対する包括的なコメントがあり、脳死・臓器移植問題をドナー候補とその家族の側から捉えかえすことの重要性が、あらためて確認された。

（香西）

Nick Zangwill教授講演研究会

一ノ瀬 正樹 (人文社会系研究科教授 哲学)

去る2009年4月10日、東京大学文学部哲学研究室において午後3時より、「The International Meeting of Hongo Metaphysics Club」を開催し、その中で死生学プロジェクトの講演研究会として、英国ダラム大学のニック・ザングウィル(Nick Zangwill)教授に講演を行ってもらった。「本郷メタフィジックス・クラブ」とは、哲学研究室にて定期的に開催している研究会で、他大学あるいは外国の研究者に講演してもらい、同時に人文社会系研究科の大学院生にも発表してもらい、という形で運営されてきた。とくに、外国のゲストに講演してもらうときには、内部の大学院生の発表も含めて、すべて英語で行うというルールで開催してきたもので、内外から聴衆が集まり、本郷の哲学の研究会として徐々に定着してきつつある。今回は、本学の美学研究室の李恵珍氏、哲学研究室の萬屋博喜氏、がまず英語でプレゼンテーションを行い、その後ザングウィル教授に死生学共催の講演をしてもらう、という段取りで研究会が進められた。ザングウィル教授は本郷キャンパスをこれまでしばしば訪れており、哲学研究室にとってもお馴染みの先生である。音楽美学、認識論、心の哲学、倫理学、など幅広い領域で研究活動を遂行している。筆者自身も親交があり、2008年12月には筆者が英国ダラム大学を訪れて、講演する機会をいただいた。今回再びザングウィル教授を本郷に迎えて、東大とダラム大学との交流の深まりを肌で実感した。

さて、このたびのザングウィル教授の講演は「Life, Activity, and Knowing I Exist」と題されたもので、一言で言ってしまうと、私たちの日常的な生の営みはすべてなんらかの「活動」(activity)であり、そうした活動の根底には「私が存在するという知識」が先取されていなければならないのであり、それは「私が活動の原因である」という因果的理解でもある、という主張が提示された。もちろん、こうしたストレートな主張に対しては、私たちが昏睡状態に陥っているとき、麻痺しているとき、熟睡しているとき、カルト教団に洗脳されているとき、買い物などをしながらも上の空でいるとき、あるいは嬰兒や重篤な認知症患者の場合など、反例となりそうな事例が直ちに突きつけられよう。しかし、そのような場合でも、ザングウィル教授によれば、基本的には実際上私

たちは何らかの意味で活動している、とされる。考えたり、推論したりすることも、れっきとした心の「活動」なのである。逆の言い方をすれば、もし私が真に活動をしておらず、自分の存在の知識がないとしたら、私は存在しない、ということになる。少なくとも、私が存在することと私が活動することとの間の「一般的な本質的關係」は成立し続けるはずだということである。総じて、私たちの「生」というものの根底に自己存在についての「知識」があるという主張であり、「生」についての認識論的基礎を解明するという作業であったかと理解される。

突っ込みどころの多い話で、多くの質問が惹起され、大変に活発な質疑が交わされた。筆者自身もいろいろと質問したかったが、時間がなくなり、多少奇妙な質問の一つだけした。それは、「私の存在」という観念には「私の父の存在」や「私の祖父の存在」などという観念も(先祖というものを私の生命の原因と定義する限り)ある意味で論理的に含意されていると考えることができ、だとしたら、私の活動には私の父や祖父等の存在の知識も要請されるということになるのではないかと、という質問である。ザングウィル教授はこれに対し、親子の関係は決してロジカルなものではない、と応答してくれた。完全に私が満足したわけではない。しかし、今回のような、ナイーブでありながらも哲学の核心に直結するような議論展開に接して、筆者自身も含めて多くの聴衆が哲学の原風景に引き戻され、故郷の魅力を再認識したような感覚を抱いたのではなかろうか。ものを考える、生と死に想いをめぐらす、そうした豊かな時間を共有できることに感謝し、ダラム大学との今後のさらなる研究協力にも思いを馳せた一日であった。



土屋 太祐（日本学術振興会特別研究員（元 本G-COE特任研究員））

2009年3月19日の死生学研究会において、日頃の研究の成果を報告する機会をあたえられた。内容はかなり専門的で、分かりづらいところもあったかと思うが、自分の研究を「死生学」という文脈から見直すことは、非常によい鍛錬の機会であったと思う。

馬祖以降の唐代禅宗史はおおよそ三つの段階に分けることができる。第一は馬祖の「作用即性」説と呼ばれる思想が登場する段階である。この思想は大いに流行し、これによって禅宗史は全く新たな時代に入る。しかしこの思想は同時に多くの弊害を生み、批判を招くことにもなる。この批判が現れるのが第二の段階である。そして第三の段階として、これらの議論を総合する形で雪峰集団が現れる。玄沙師備はその代表人物の一人である。

禅の目標をごく簡単に言うならば、それは、世界の本質である自己の心を知ることであろう。この心は一般に心の本体（体、本質）とそこから生れるはたらき（用、現象）に分けられる。この場合、体は常、用は無常とされるのが一般的であり、馬祖以前の伝統では一般的にこの常なる体の体得が目指される。しかしそれはまた非常に困難なことでもある。なぜなら、心の体とは、認識などはたらきが現れる前の状態であり、認識対象を持たず、具体的な姿をいっさい取らないからである。では如何にして心の体を体得するのか？この難問に対して馬祖は、次のように回答する。つまり、心の用は心の体から生れたものであり、両者は本質的に違わない。したがって現実的な心の用、つまり動作や認識作用、そしてそこから生み出された認識対象こそが心の本質にほかならない、と。この思想は非常に画期的であり、大いに流行するが、また、仏教の伝統に背くものでもあり、多くの批判を招くこととなった。しかし、現象世界の真実性を肯定する思想は、中国の仏教者の心を深く捉えたのであろう、馬祖に対して向けられた批判のほとんどすべてが、馬祖思想の持つ問題を指摘しながらも、その最終段階では馬祖の結論を追認している。つまりこれらの批判は、馬祖の思想の否定ではなく、その修正を目指していたのである。玄沙の思想もまた、そのような動きの一つであった。



では、玄沙はいかにして馬祖の思想の問題を解決するのか？馬祖の思想では、個人の身上に現れた心の用と心の体が直接結びつけられた。玄沙はこの用を虚妄なるものとして、いったん否定し、用の背後に、用に還元できない常なる心の体が存在することを指摘する。そして、この常なる心の体を直接、現象世界へと押し広げ、森羅万象の真なることを保証するのである。では、馬祖の思想と玄沙の結論ではどこが異なるのか？玄沙によれば、馬祖が心の体と等置した心の用は、あくまで個人の身上に現れたものでしかなく、普遍的な存在から脱落した個別的な存在である。この個性こそが、用の虚妄性の原因である。玄沙の結論においては、そのような個性をこえた普遍的な真如のはたらきが現象界に押し広げられているのである。言葉を換えて言えば、個人の個性性を滅却し、本来的普遍的に世界に充満している真如に回帰することを玄沙は要求しているのである。

さて、以上の考察にはどのような死生学的意義があるだろうか？私はここに、個と真理に関する東洋的な考え方の典型的表出を見て取りたいと思う。つまり、個を滅して普遍全体的な真理に回帰するという図式である。玄沙の思想は宋代禅に受け継がれ、宋代には禅と儒学の交流の中から、朱子学が現れ、その後の東アジアに長く影響を与えていく。玄沙の思想は歴史的にも現代東アジアとつながっている。もちろん、東アジアにおける個の問題は非常に複雑で、これを十分に検討するためには、その後の思想史の展開を細かく見ていく必要がある。しかし、玄沙の思想を、東アジアにおける個のあり方を考察するきっかけにすることは可能であろうと思う。

本G-COE若手研究者の研究テーマ

特任研究員

氏名	ふりがな	専門領域	研究テーマ
伊藤由希子	いとう ゆきこ	倫理学 日本思想	『日本霊異記』における生と死の思想
嶋内博愛	しまうち ひろえ	文化人類学 ドイツ民族学	・主にドイツ語圏の民間伝承 (とくにデモンに関するもの) の分析 ・オーストリア南ケルンテン地方のスロヴェニア系先住民マイノリティの生活文化
富澤かな	とみざわ かな	宗教学 インド研究とオリエンタリズム	・インドを中心とする東洋のイメージと表象 ・インドにおけるイギリス人墓地の社会・文化的意義
竹内聖一	たけうち せいいち	行為論	・行為者に固有な世界の捉え方の研究 ・意図概念の道徳的意義の研究
東由美子	ひがし ゆみこ	神話学 人文地理学	神話における死と再生のシンボルに関する研究
藤崎衛	ふじさき まもる	西洋史学	中世キリスト教世界における死生観
福間聡	ふくま さとし	社会哲学 メタ倫理学 規範倫理学	生と死の観点から考察された公正な社会 —正義論とメタ倫理学に基づいて—
松本聡子	まつもと さとこ	精神保健学	・TEMP S-Aに関する研究 ・矯正施設における処遇に関する研究 ・薬物乱用に関する研究
柳原良江	やなぎはら よしえ	生命倫理学 社会学	・生殖技術に関する言説の分析 ・身体のリソース化に関する研究
会田薫子	あいた かおるこ	医療社会学 医療倫理学	終末期医療
堀田和義	ほった かずよし	インド哲学	古代インド宗教における死生観の解明：ジャイナ教を事例として
ワルドライアン	WARD, Ryan	宗教学 近代日仏教史	近代日本仏教史における浄土観の変遷をめぐって
加藤大基	かとう だいき	放射線治療	がん患者の死生観
石川公彌子	いしかわ くみこ	日本政治思想史	国学における死生観（本居宣長、平田篤胤、柳田國男、折口信夫、保田興重郎を中心に）
小椋宗一郎	おぐら そういちろう	哲学 倫理学 生命倫理学	ドイツにおける生命政策、ヨーロッパにおける「人格」概念史、ヘーゲル法哲学
香西豊子	こうざい とよこ	医学史 社会学 民俗学	・「人体」の運用をめぐるシステムの歴史 ・感染症の歴史と生命観
土屋敦	つちや あつし	医療社会学 科学技術社会学 生命倫理学 社会調査法	・日本の優生史（1950-70年代を中心に） ・生殖技術論・遺伝医療関連の社会調査
土屋裕子	つちや ゆうこ	法律学 医療倫理学	現代医療における患者の自己決定権と法
朴倍暎	ぱく べえよん	倫理学	日本の儒教倫理における「死生観」の再構築—韓国儒教との比較を手掛かりに
吉澤保	よしざわ たもつ	フランス近代思想	コンディヤック研究、ルソー研究
吉田京子	よしだ きょうこ	イスラム学 シーア派思想	シーア派思想における生と死の位置づけ（古典的イマーム論から現代の殉教思想まで） イスラームにおける生命倫理観

学振研究員

氏名	ふりがな	所属研究室	研究テーマ
中西俊英	なかにし としひで	インド哲学・仏教学研究室	唐代仏教思想における死生観

『<いのち>をめぐる近代史 墮胎から人工妊娠中絶へ』

石川 公彌子 (本G-COE特任研究員 日本政治思想史)

前近代の日本では長らく、生後間もない子を殺す「間引き」という風習が行われてきた。それは必ずしも貧しさから起こるものではなく、生活水準を保つためにも行われていた。これを批判したのが、江戸後期の国学者・鈴木重胤である。「子づくり」は人間の行為だが、妊娠を成立させるのは神々のはたらきにほかならない。したがって、神々がもたらした「子宝」を間引く行為は神罰の対象なのである(『世継草』)。

このような風習は近代以降、いかに変容したのか。多数の資料に当たりつつ分析を行ったのが、本書である。墮胎当事者としては農業従事者や奉公人等の貧困層や女工などの若い独身者が多数を占め、胎児は私生児であることが多かった。墮胎は主として婚姻関係外、家族計画外で起こるものであり、家族計画による江戸時代の間引きとは一線を画していた。それゆえ、近代日本において行われていたのは「間引き」ではなく「墮胎」であった。しかも墮胎は日露戦争後の時期でさえ、地域社会のひとつの「習慣」、社会伝承的な民俗事象として存在していた。人為的な破水による強制的早産という形態を取るゆえ、墮胎時の妊娠月数は妊娠五ヶ月を越えることがほとんどであった。そのため、1900年代から1910年代は死産率のピークを迎えていた。近代国家・資本主義体制下でありながら、前近代からの社会伝承的なネットワークの残存のなかで墮胎が行われるという矛盾が起こっていたのである。

このような墮胎をもたらす男女の性は、ヨバイに代表される社会伝承的な民俗事象にもとづいており、そこでは男女間の不平等が前提とされていた。柳田國男や南方熊楠はヨバイを恋愛とみなしたが、著者はヨバイは男女間の平等な恋愛とはみなせないという年来の主張を展開する。すなわち墮胎の背景には、性をめぐっては男性優位、生殖をめぐっては直接的には女性のみが関与し男性は無関係であるという生活習慣が存在していた。しかも、墮胎罪は当事者の一方である女性を主な対象とし、男性は免れえるシステムであった。ところが日露戦争後、「私通」等の性をめぐる社会伝承的な民俗事象への統制が開始された。さらに、1920年代までの刑法学者は墮胎を女性の自傷行為であり刑罰の対象外であると認識していたが、1930年代に入ると、労働者の生活保護の観点から

墮胎罪が否定されるようになった。したがって、墮胎罪と家父長制、人口政策を連続させてとらえることはできない。

この背景に、1910年代から1920年代にかけての日本社会の変化がある。帝国主義的段階において、第一次世界大戦により女性の社会進出が果たされたヨーロッパの近代国家を手本として女性の身体といのちへの視線が社会的広がりを見せるようになり、また朝鮮人女工や労働者がそれまで日本人の占めていた低賃金かつ劣悪な労働環境に置かれるようになり、日本社会全体の経済的底上げが図られるようになった。それゆえ、近代的な人権が生活の中でようやく保証されるようになったのである。このようにして、地域社会に産科医が登場し、医療器具を用いた、妊娠月数が少ない時点での墮胎すなわち人工妊娠中絶が行われるようになった。同時に、近代産婆としての助産婦が定着し、男性の按摩・鍼灸師等も出産・墮胎に関与した前近代的な産婆制から、出産のみを目的とする女性限定のジェンダーとしての近代産婆制への転換が行われ、「いのちの近代」が定着した。しかもヨバイが犯罪の温床と認識されるようになり、社会伝承的な性が否定され崩壊していったのである。

しかし、1930年代は昭和恐慌の影響を受け、とくに東北を中心に農村が疲弊した。本書では静岡県のとりのわけ市街地を例にして「いのちの近代」の到来を描写しているが、著者みずから指摘しているように静岡県内にも農村漁村を中心に無産婆村が存在していた。果たして、静岡県以外の地域の様子はいかなるものであったのか。「いのちの近代」は他地域にも定着していたのか、より広範な地域との比較も必要であろう。

とまれ、本書は近現代社会分析の方法論としての社会構成史のすぐれた成果のひとつである。末尾で著者自身が主張するように、「過去の存在を資料として意味づけ、現代社会との連続性において社会現象の歴史的展開をめぐる一定の規則性を抽出する」という「歴史学の存在理由」を存分に示している。

(吉川弘文館、2009年5月刊行)



研究機関誌『死生学研究』第11号と、特集号として、2008年2月18日、19日に北京にて開催されたワークショップ「日中国際研究会議 東アジアの死生学へ」に関する報告論集を発刊いたしました。各号の内容は次の通りです。

『死生学研究』第11号

講演

キャロル・ウォグリン
死別とグリーフに向き合う
他者へのケアとセルフケア（1）

・佐藤健二

関東大震災における流言蜚語

・塚本昌則

二十世紀フランス文学と死 類型化の試み

・朝倉友海

「生命の学問」から「死の現象学」へ
後期牟宗三による仏教的転回と京都学派

・伊藤紫織

死絵と画中画 肖像としての死絵

・蝦名翠

上代文学における「王権の中の死」
反乱者の場合

・嶋内博愛

〈時宜にかなわず死んだ子ども〉の追想
怪火・甦らせの儀礼・葬送儀礼

・古田徹也

生死をめぐる極限的事例が示すもの
生命倫理の問題設定と解決のあり方に関する一考察

・山本伸裕

清沢満之における生命観と倫理観

公開・国際シンポジウム

「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」

秋山聰／富澤かな
はじめに

・肥田路美

舍利信仰と王権

・エリック・トゥーノ

聖なる欠片からモノ（造形物）へ、あるいはその逆

初期中世の視覚文化における聖遺物とイメージ

・スコット・B・モントゴメリー

黄金の肌、光を放つ骨

中世の知覚における聖遺物と聖遺物容器の融合

・根立研介

日本の肖像彫刻と遺骨崇拜

・秋山聰

聖遺物と造形イメージの相関性

東西比較の試み

・藤崎衛

はかなき肉体

中世中期における教皇の死の表象

・松本聡子／野村俊明／土屋悠華／奥村雄介

精神障害を有する受刑者の社会復帰

欧文レジュメ

(2009年3月15日発行)



既刊の第9号と第10号

『死生学研究』特集号 日中国際研究会議 東アジアの死生学へ

開会挨拶

・中国側主催者代表 卞崇道 | 中華日本哲学会
会長

・日本側主催者代表 竹内整一 | 東京大学教授
司会： 王青 | 中華日本哲学会副会長

【第一部】

・石川公彌子 | 東京大学COE特任研究員
近代日本人の死生観

・鄭曉江 | 江西師範大学教授
「天を楽しむ命を知る」と「之に安んずること
命のごとし」—— 儒家による生死の知恵の現代的
解釈

・森下直貴 | 浜松医科大学教授
〈無形のものたち〉のリアリティ
—— 日本人の死生感の現在

・第一部討論

司会： 佐藤康邦 | 放送大学教授
潘暢和 | 中華日本哲学会副会長・
事務局長・延辺大学教授

通訳： 土屋太祐 | 東京大学COE特任研究員
郭連友 | 北京日本学研究センター教授

【第二部】

・朱曉鵬 | 杭州師範大学教授
道家の死生観 —— その思想的特徴と現代的意義

・末木文美士 | 東京大学教授
死者と向き合う仏教の可能性

・張志強 | 中国社会科学院教授
生死、道徳、革命
—— 清末の「志士」の理念における個、社会、道徳

・第二部討論

司会： 森秀樹 | 立教大学教授

牛建科 | 中華日本哲学会副会長・山東
大学教授

通訳： 土屋太祐 | 東京大学COE特任研究員
徐金鳳 | 瀋陽航空学院外国語学院講師

【第三部】

・中岡成文 | 大阪大学教授
弱さの構築 —— 死生の臨床哲学へ

・李萍 | 中国人民大学教授
職業階層と現代中国人の死生観

・第三部討論

司会： 森秀樹 | 立教大学教授
張三夕 | 武漢華中師範大学教授
通訳： 土屋太祐 | 東京大学COE特任研究員
徐金鳳 | 瀋陽航空学院外国語学院講師

【総括】

・池澤優 | 東京大学准教授
生命倫理と文化・伝統
—— 儒教的生命倫理の構築の試みを通して ——

・靳鳳林 | 中央党校教授
現状と行方
—— 中国における死の哲学、三十年間の研究状況 ——

・総合討論

日中死生学研究の現状と未来

司会： 竹内整一 | 東京大学教授
王守華 | 中華日本哲学会吊誉会長
通訳： 土屋太祐 | 東京大学COE特任研究員
郭連友 | 北京日本学研究センター教授

・閉会挨拶

末木文美士 | 東京大学教授
鄭曉江 | 江西師範大学道徳と生命研究所所長・
教授
通訳： 任萍 | 浙江樹人大学講師

(2009年3月25日発行)



日本語版



中国語版

《医療・介護従事者のための死生学》

2009冬季セミナー 予告

清水 哲郎 (人文社会系研究科上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学)

2009年12月に、東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」主催による、現場の医療・介護従事者を対象とするセミナーを開催する予定である。このセミナーは、医療・介護従事者が、死生に関わる実践的な知と、それをバックアップする教養を身につけることで、患者・利用者とその家族に対し、より良いケアが提供できるよう支援することを目的として、2007年度に開始したものである。2008年度からは《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースを立ち上げ、受講者が継続的に研鑽を積むことができるようにしている。これまでに、本学本郷キャンパスで開かれた4回のセミナーには、全国各地から延べ300名以上の医師・看護師・助産師・保健師・ソーシャルワーカー・社会福祉士・介護福祉士・臨床心理士等の

専門職者と、医療・介護の問題に関心をもつ一般市民が参加している。

2009冬季セミナーでは、「喪失とケア」をテーマに、米国から有力な実践・研究者を招いて、喪失（主に死別）のケアに関してワークショップを開催する。招聘を予定しているのは、オレゴン州ポートランドにあるダギー・センターの活動を中心となって推進しているドナ・シャーマン、カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校の家族看護学の教授であるエリザベス・ディヴィス、『死別の悲しみに向き合う』の著者のトマス・アティグの3名である。ダギー・センターは、家族との死別に直面している子どもたちを支援するため、1982年に設立され、先駆的なピア・サポート・モデルを開発したことで世界的に知られている。

《医療・介護従事者のための死生学》

2009冬季セミナー

「喪失とケア」に関する3つのワークショップ

【主催】東京大学グローバルCOE

「死生学の展開と組織化」

【日時】12月6日(日)

【講師】Donna Schuurman

Elizabeth Davies

Thomas Attig

【会場】本郷キャンパス 法文二号館一番大教室

*このワークショップに参加するには事前登録が必要です。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/ja/yotei/s091205.htm>から登録してください。(8月から登録開始)

《第15回日本臨床死生学会大会》

大会テーマ「臨床現場で生きる / 活かす死生学」

【会期】2009年12月5日(土)、6日(日)

【会場】本郷キャンパス メイン会場：安田講堂

【大会長】清水哲郎 (東京大学)

【問い合わせ】第15回日本臨床死生学会大会事務局
e-mail: 15jsct@gmail.com

*参加の事前登録および一般演題登録を受付中です。

*演題登録や参加の事前登録の方法など、本大会の詳細については大会ホームページをご覧ください。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/15jsct/>

【主要プログラム】

2009年12月5日(土)

講演1 「死生学の臨床現場への寄与」

島菌 進

(東京大学G-COE「死生学の展開と組織化」拠点リーダー)

座長 清水哲郎 (東京大学)

講演2 「喪失経験とケア」 *逐次通訳付

Donna Schuurman

(The Dougy Center)

座長 若林一美 (山梨英和大学)

大会長講演 「ケアと臨床死生学・倫理学」

清水哲郎 (東京大学)

座長 行岡哲男 (東京医科大学)

今回のセミナーと並行して、第15回日本臨床死生学会大会が開催される予定であるが、本G-COEは、同大会を研究活動の社会還元の間として位置づけている。本大会は「臨床現場で生きる／活かす死生学」というテーマのもとで、死生学の実践知が現場で生きている様子をあらわにし、また、さまざまな分野にわたる死生学の諸研究を臨床現場によりよく活かすため、今後の研究・教育・臨床活動の方向性を見定めることを趣旨としている。

この大会では、自らの実存が脅かされる仕方で人が死生を切実に意識すると思われる喪失体験に焦点をあて、死別のみならず、その他の喪失についても、その体験をどう理解し、どう寄り添うかということから、喪失の中で前途の選択を迫られる人をサポートしつつ意思決定プロセスをどう辿

るかという臨床倫理的課題までを視野に入れる。研究者や医療職者が、学生や一般市民とともに学び合う機会となることを期待している。予定している登壇者や主要プログラムの構成は、以下をご覧いただきたい。

また、本グローバルCOEの主催で、公開講演会「いのちのバトンタッチ - 映画『おくりびと』によせて」が開かれる予定である。演者は、今年、アカデミー賞外国語映画賞を受賞した『おくりびと』のもとになったとされる『納棺夫日記』の著者の青木新門氏である。

この機会に、2009冬季セミナー、第15回日本臨床死生学会大会、公開講演会への参加をご検討いただければ幸いである。

シンポジウム1

「遺された人々の思いに寄り添って」

シンポジスト

石井千賀子 (ルーテル学院大学)
下田正弘 (東京大学)
鈴木剛子
(グリーン・カウンセリング・センター)

藤井美和 (関西学院大学)

座長 小野充一 (早稲田大学)

山崎浩司 (東京大学)

シンポジウム2

「ケア現場における喪失と臨床倫理」

シンポジスト

石垣靖子 (北海道医療大学)
高橋 都 (獨協医科大学)
竹内整一 (東京大学)
橋本 操 (日本ALS協会)

座長 酒井忠昭

(ホームケアエキスパート協会)

安藤泰至 (鳥取大学)

2009年12月6日(日)

講演3 「喪失をめぐる看護とケア」

* 逐次通訳付

Elizabeth Davies
(University of California,
San Francisco)

座長 柏木哲夫 (金城学院大学)

講演4 「喪失経験とケア」 * 逐次通訳付

Thomas Attig
(『死別の悲しみに向き合う』著者)

座長 平山正実 (聖学院大学)

《公開講演会「いのちのバトンタッチ

- 映画『おくりびと』によせて》

【主催】 東京大学グローバルCOE

「死生学の展開と組織化」

【日時】 12月5日(土) 16:20~18:00

【会場】 本郷キャンパス 安田講堂

【演者】 青木新門 (『納棺夫日記』著者)

【座長】 竹内整一 (東京大学)

生 第十五回
日本臨床
死生学会大会

目 次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

百年の寿命をもとめて

永ノ尾信悟 2

●イベント報告●

公開シンポジウム「死生学の可能性」

竹内 整一 3

死生学ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」

一ノ瀬正樹 4

臨床倫理セミナー

竹内 聖一／会田 薫子 6

ワークショップ「生殖と死の生命倫理」

柳原 良江／香西 豊子 7

本郷メタフィジックス・クラブおよびNick Zangwill教授講演研究会

一ノ瀬正樹 8

第24回死生学研究会

土屋 太祐 9

●書籍紹介●

書評 岩田重則著『<いのち>をめぐる近代史 墮胎から人工妊娠中絶へ』

石川公彌子 11

『死生学研究』

12

●企画案内●

《医療・介護従事者のための死生学》2009冬季セミナー

清水 哲郎 14



死生学 DALS ニュースレター No.23

平成21年7月23日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島蘭 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>